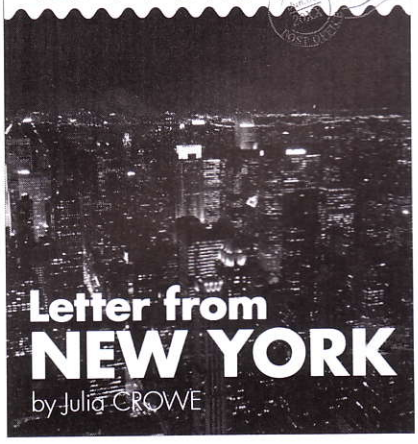
ニューヨーク便り

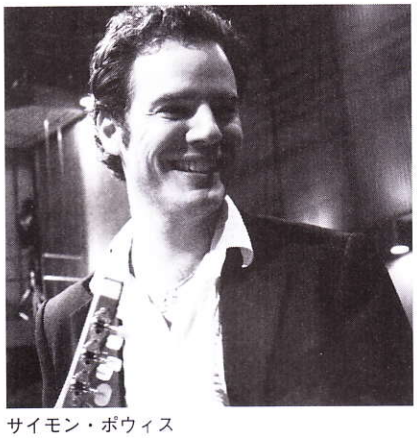
ジュリア・クロウ　訳：関塚亮司



●オーストラリアの新鋭ギタリスト、サイモン・ポウィス

オーストラリアのシドニーで育ったギタリスト、サイモン・ポウィスは、5歳でコルネット（トランペットに似た金管楽器）を始めたが、ギターに夢中になったのは11歳のときだった。ラファエル・アゴスティノ教授に師事し、2004年にシドニー音楽学校を卒業した。その後、ベンジャミン・ヴァードリーが主任教授を務めるイェール大学で、音楽学のマスターを取得し博士号を取るためにアメリカに留学した。ワシントンDCのケネディーセンター、ロンドンのオーストラリア・ハウス、カナダのバンフ芸術センターなどでソリストとして演奏した実績がある。現在彼は、イェール大学の博士課程の卒業論文を書いているところだが、そのテーマは、『初見技法の開発に関する研究』である。

彼は最近、ニューヨークのフラティロン地区にあるミュージック・パフォーマンス・ホールのワークショップで、ジュリアン・ブリームに触発されたプログラムでコンサートを開いた。


サイモン・ポウィス

演奏曲目は、ウォルトンの〈5つのバガテル〉、ソルの〈悲歌風幻想曲Op.59〉、アルベニスの作品から〈コルドバ〉、〈グラナダ〉、〈マジョルカ〉、〈アストゥリアス（レイエンダ）〉。そして、アンコールとしてマンドリンを演奏したが、これは彼にとって初めての経験だった。

コルネットからギターに変わった理由をポウィスは次のように説明している。

「学校のブラスバンドでコルネットを吹いていましたが、他に良い楽器がないか探していました。ギタリストがメンバーになっているバンドが学校に来たとき、私はギターに惹きつけられました。ギターの何が私の関心を惹いたのかわかりません。また、そのときバンドが演奏していた音楽さえ覚えていません。多分、軽いロックだったと思いますが、子供たちの気を惹くようなバンド演奏だったと思います。私が覚えているのは、ギターをじっと見つめていたことです。その日の午後、家から迎えの車が来るまでの間、ワークブックに『ギター、ギター』と繰り返し書いていました」

「家に帰ってから、父に、ギターを手に入れることが出来るかどうか尋ねたのです。すると、『食器棚に古いギターが入っているよ』と言われました。それからというもの、スポーツも演劇も友達との遊びも全て忘れ、妄想に取り憑かれた私は、ギターに全ての時間を奪われるようになりました」

「私の兄は、テナー・ジャズ・サクソフォンの奏者ですが、私がギターを始めたとき、彼はスクールバンドでクラシック音楽をやっていました。彼がベッドルームで弾いている交響曲やバッハのパルティータを良く聴いたので、この種の音楽に惹かれたのを覚えています。

初めは、レッド・ツェッペリン、ジミ・ヘンドリックス、スティーブ・ヴァイ、ジョー・サトリアーニを聴いたり弾いたりしていました。暫くしてから兄のレコードを聴き始めましたが、自分が何を聴いていたのか分かりませんでした。モーツァルトの〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉が入った録音だったように思います。私にとってモーツァルトの音楽は、バランスもリズムも完璧だと感られましたし、現実から逃避させてくれました。特に長い間好きだったのは〈レクイエム〉です。ですから後日、モーツァルトが書いたのは、この作品の前半部分だけだと知ってがっかりしました。この失望は、ジョン・ウィリアムスが“映画音楽を作曲するギターの神様”ではないことを知ったときと同じように不愉快な経験でした」

「16歳になるまで私は、学校の昼休みになると、クラシック音楽を聴くために大きなヘッドホンを付けて校庭を散歩していました。これが理由で、私が校内で有名になったとは知りませんでしたが、それでも幸せだったし、気にもしませんでした。クラシック音楽は、段階的に学ぶことが楽しいのだと知りました。クラシックギターには、初歩の段階から、私にとって小さな目標になる曲がありました。そのうちの1曲を練習し始めると、それが完成するまで練習を続けることが出来ました」

●北京でのコンサート

ポウィスは、アデレード国際ギターフェスティバルで、リューティストのエディン・カラマゾフと共演したのがきっかけとなり、2012年には北京で2回公演している。

「私の父は国連の外交官として北京に駐在しています」

「ですから、最近はちょっと難しくなりましたが、北京では父と一緒にいる時間がありました。今年は全てが順調に行けば、中国ツアーをするために地方にも行く予定です。私が音楽を愛する理由の1つは、その普遍性です。北京ほど、コミュニュケートする手段が音楽だけという場所は他にはありません」

「私は、中国の798地区と北京大学で公演しました。798地区というのは、芸術品を展示するギャラリーが多い北京の広い区域です。これは、“ギター・W・ワークショップ”のDuke Yipengが監督した『弦楽器に捧げる139回』という大胆なコンサートシリーズの幕開けとなるコンサートでした。北京大学でのコンサートチケットは完売で、聴衆は学生ですが、収容人員300席というギターには素晴らしいホールでした。私にとって初めての場所で演奏するときは、必ず聴衆の好むレパートリーが何かを主催者に聞くことにしていますが、このコンサートでは、スペインとラテンアメリカ

サイモン・ポウィス

の作品でプログラムを組むことにしました」

●初見能力についての研究

自分の将来にとって、演奏だけで収入を得るのが難しいと判断したポウィスは、博士課程の研究テーマとして実践的な課題を選んだ。

「将来、大学で教えるチャンスが開けると思い、博士号を目指すことにしました」

「教えることは、いつも楽しく、中でも私が好きなのは、レパートリーや楽器に対する情熱を共有する年長の学生達です」

「私は、理論的な、あるいはアカデミックなものではなく、実用的なテーマで博士論文を書きたいと思っていました。そこで"初見能力"という言葉が私にアピールしました。その理由は、クラシックギターではこれがあまり研究されていないテーマの1つであり、自分が教育の場で取り入れることが出来ると思ったからです。論文では、特にスキルを指導する方法論を論じています。私の論文は、特に教育方法に焦点を当てていますから、ここ数年間、この研究をベースに指導書を書き、オンラインで販売しています」

「初見に伴う精神的な負担が話題になった際、私は何回かプレゼンテーションを行なってきました。同時に、初見能力の改善方法について数多くの手法を披露しました。初見の悩みを解決する決定的な方法があると期待している人を良く見かけますが、スキルを改善する効果的な方法がある一方、結局全ては、ハードワークと忍耐に帰結するということになります」

「初見能力の熟達は、克服できない課題だと考えているギタリストが多いようです。あまりにも難しいので決して攻略できないと考えている人が大勢います。ですから、私は、初見を学ぶのにどのようなスキルと知識が必要か、ギタリストが何故これを難しいと思うのか、といったことから議論を始めます。ギターのフレットはピアノの鍵盤と違って、ネックの位置によって幅が狭くなることと、演奏曲目の難しさがあります。しかし、最大の原因は、クラシックギタリストが長年培ってきた文化と言うべき、舞台上では常にソロを弾きたいというところにあると思います」

「私がプレゼンテーションで伝えたいのは、初見能力のスキルをレベルアップすることは誰にでも出来るということです。しかし残念なことに、ほとんどの人はフラストレーションのために早々に諦めてしまいます。しかしギターの場合、プロのレベルにある人でさえ充分な初見能力無しに、演奏活動を続けて行くことが出来るというのも事実です」

「編曲、教育、室内楽、暗譜、レパートリーを増やすことなど、初見能力が高いと、全てにおいてレベルアップが出来ます。私が好んで使う比喩は、"我々の音楽言語が流暢でないことと、外国に暮らしてコミュニケーション出来ないでいるのとは類似している"ということです。それは、制限的で、効果のない、満たされることが少ない経験です。初見能力は、様式の知識、楽典、フィンガーボード・ハーモニー、即興能力、そしてリズムが一体となった幅広い音楽知識の部分集合を包含した非常に複雑なスキルなのです」

「一般的に言って、音楽的センスのレベルはギター・コミュニティーの中で成長していきますが、初見能力の優れた若い学生達を見るのは素晴らしいことです。つまり私が言いたいのは、指導者こそ最も重要だということです。もし指導者が、初見能力と広い音楽的センスに重点を置いた授業をするなら、ギター文化は発展し続け、我々の初見能力は他の音楽家との共演を可能にするのに充分なレベルに到達します」

ポウィスは、初見能力の向上を促進させるための教育的ウェブサイトを継続して立ち上げて来たので、近く共同音楽プロジェクトで演奏することが期待されている。

「しかし、現在私にとって最大のイベントは、卒業コンサートと博士号取得試験でしょう。イェール大学の音楽芸術分野における博士号プログラムは、非常にユニークです。学習課題が修了し論文審査が終わると、学生は実社会に出てプロとしての業績を示すポートフォリオ（個人の経歴資料）を発展させなければなりません。イェール大学では、この課題を達成するために学生に、1～6年間の猶予を与え、卒業コンサートを開くことを求め、さらに、西欧のクラシック音楽に関する幅広い範囲の中からトピックスを選んで学生に厳しい難問を突きつける試験が行なわれます。私は、このプログラムの入学試験以上に難しい試験を経験したことがないので、この最終試験が最も厳しい挑戦になると思います。自分の"幸運"を祈っているところです」

さらに詳しいことは、下記を参照。
www.simonpowis.com
http://www.classicalguitarcorner.com/